

つながる、つながる、なにがつながる？

## < るあんのフランスパリ日記 その② >

※「るあん」…音風景をキーワードに文化活動を行う「ビックママ・プロジェクト」から派生した音楽隊。2013年、JAA 国際アコーディオンコンクール・パフォーマンスアンサンブル部門にて、桑山哲也賞受賞。翌年、横浜赤レンガ倉庫にて、アコーディオニスト coba 主催の「Bellows Lovers Night」に出演。一音一会を大切に、人とのつながりの中で、日々活動している。

HP:<https://bigmamaluann.wixsite.com/main>

ボンジュール！私たちは音楽隊「るあん」といいます。  
メンバーは、アコーディオニストのエレガンス・カオルンに、ヴァイオリンのヒラリン、それから食いしん坊のスガちゃんに（マンドリン、フルート、歌）、カーリーなポニョポニョ・ヘアがトレードマークの私、セッキーです。

（※前回の内容を知りたい方は、下記のHPを開いてくださいね。）

<http://www.kanyo-acco.jp/jikkouinkainews/1907p27-30.pdf>

さて、9月25日。水曜日。

パリに着いて4日目の朝のことです。長年フランス在住の、カオルンの従妹のミサさんが、モンパルナスの私たちの宿泊するホテル・カクタスにやってきましたよ。彼女は現役のエールフランスのCA。長時間のフライトの仕事を終え、シャルル・ドゴール空港に着くや否や、家族の待つ家にも戻らず、真っ先に私たちの元へ飛んできてくれたのです。ミサさんはスーツケース片手に、狭い螺旋階段を4階まで一気に駆け上がりました。

「ボンジュール！」

彼女は私たちのいるスイートルームのドアを勢いよくノックしました。

カオルンがドアを開けると、ミサさんは息を弾ませながら、飛び切りの笑顔を私たちに向けました。

「ごきげんよう、るあんの皆さん。用意はいいですか？今日は街へと繰り出し演奏しますよ」

ミサさんは全くの疲れ知らずです。

彼女は続けました。

「いまからUber（ウーバー。配車web）を呼びますからね。さあ皆さん、荷物をまとめて下に降りて！」



※写真左端がミサさん。

こうして私たちはホテル前から Uber に乗ると、びゅーん！  
まずは本日の行動の拠点となる、シズさんの経営する美容院へと向かったの  
でした。

「ATELIER O'SHIZ-U」と書かれたその美容院は、ノートルダム寺院の近  
くにありました。今年5月にオープンしたばかりで、まだ真新しさが感じら  
れます。外壁も店内も全てピュア・ホワイト。

私たちがお店に着くと、シズさんはすぐに隣の Brasserie（※ブラッスリ  
ー…お酒と食事を提供するお店）に行き、ビールをオーダーしてお盆に載  
せて持ってきてくれました。

「さあ、景気づけ。まずは皆で飲もうよ！」

そして私たちは、コップに注がれたビールで乾杯しました。  
ミサさんとシズさんは、パリで知り合った、喜びも悲しみもともに分かち合  
った親友同士。二人が話に花を咲かせていると、そのうちにカオルンがアコ  
ーディオンをポロポロと弾き始めました。曲は「スウィング・ワルツ」や「パ  
リ空・・・」。なぜだかわからないけれど、私は急に感動して泣きそうになっ  
てしまいました。

…私はるあんの中ではパフォーマーで、本格アコのカオルンの足元にも及ば  
ないのだけれど、私もすぐに弾きたい気分になって、背バンドに腕を通して  
いました。気が付くと、スガちゃんもカオルンのアコに合わせてマンドリン  
を弾き始め、ヒラリンもヴァイオリンを弾いているではありませんか。

私たち4人は外に出て、シズさんの店の前で演奏し始めました。街ゆく人  
たちは足を止め、私たちの演奏を聴いています。道路を挟んで向かいの雑貨  
屋の店員も、仕事の手を休めてリズムをとっています。アパルトマンの上階  
の人も、やがてベランダに出て…。

ああ、なんて素敵なんでしょう！パリにいながらにして、人々が私たちの  
音楽を受け入れてくれているのです。

「おおシャンゼリゼ」や「パリカナイク」を奏でながら、気が付くと私の目  
からは大粒の涙が溢れていました。



・街中の演奏隊るあん。（左写真）

・シズさんと私（右写真）



さて、シズさんの店の前で私たちが演奏したのは、いわばウォーミング・アップのようなもの。いよいよ実際に、楽器を持ってパリの街に繰り出す時間になりました。街の様子をよく知るミサさんが、私たちにテキパキと指示します。

「荷物はなるべくミニマムにね。大きなものは、ここに預けておいてね」  
私たちは、ミサさんの話に注意深く耳を傾けていました。

これから練り歩くルートは、2日前に下見に来た通り。火災で大聖堂の屋根と尖塔が崩落した Nortre Dum（ノートルダム）の周り、花市場の前の広場、パリ市庁舎の近く、シテ島とサン・ルイ島の間、St.Germain des Pres（サン・ジェルマン・デ・プレ） 界隈…。

…思えばコンサート・ホールで演奏するとか、何かのフェスに出場するとか、そういうことでは全くなく、ただただパリの街中を練り歩き演奏しようというのですから、結構大胆です、私たち。もっとも、カオルンの従妹で長年パリに住んでいたミサさんが、自分の慣れ親しんだ場所をナビをしてくれることが予めわかっていたので、初めから安心感があったのですけど。

ミサさんを先頭に、私たち演奏隊はシズさんの店を後にしました。ビデオ片手に、ミサさんは歩きながら言います。

「パリはね、街全体が美術館なんです。だから晴れた日は外に出て、雨の降る日に美術館に行くのが良いのよ。…さあ、楽しみながら練り歩いて、1か所に立ち止まって2、3曲弾いたら、どんどん次のところへ移動することにしましょう」

…というわけで、まずは私たちは、セーヌ川からノートルダムが見える位置、アルシュヴェシェ橋の上で演奏しました。気がつくと、たまたまそこを通った人々が私たちの演奏を聴いて、立ち止まっていました。ウキウキ踊りだす人もいましたよ。



こうして私たちは、陽気に演奏しながら、街中を練り歩きました。パリの空の下、日常に溢れる音（教会の鐘の音、鳥のさえずり、カフェに集う人々の笑い声、etc…。）とともに、石畳の上を歩いて回ったのです。老若男女問わずいろんな人たちが、至る所で私たちの音楽を聴いて立ち止まり、ハミングしたり踊ったりしていました。中には楽しそうに、私たちの後についてくる人たちもいましたっけ。

…余談として、私が30代にして、学士入学で楽しみながら通った（人生2つ目の）大学の卒論のタイトルは、「音楽を超えて」というものでした。（「音風景」という造語を作ったカナダの作曲家マリー・シェーファーに興味を抱き、社会学的見地から日常に溢れる音の世界を探求）…あの論文を書いてから××年後、まさに壁のない空間で音風景を体感できるとは、セッキ一的に感慨深いものもありましたよ。

それから…そうそう、私たち、ちょっと面白いところでも演奏したのです。それは、St-Germain des Pres（サン・ジェルマン・デ・プレ）のマルシェ！そこはミサさんが長い間住んでいた場所で、まだ幼かった彼女の子どもたち（今はすっかり大きくなったお嬢さんと息子さん）が、町ぐるみのお付き合いでお世話になった場所なんですって。そこに私たちは、彼女に連れて行ってもらったんです。マルシェで働く人たちは皆、ミサさんに会うなり、「お帰り」と言わんばかりに、ハグしたり、ほっぺにキスしたりしていましたよ。

そして私たちが「おおシャンゼリゼ」を奏で始めると、大きな体の肉屋のムッシューが、ステップを踏みながら私たちのそばに寄ってきました。すぐに近くのお店やさんのマダムも、私たちの方に寄って来て、やがて二人は踊り始めましたよ。（次号へとつづく）

・写真左はサン・ジェルマン・デ・プレ  
商店街の陽気な肉屋のムッシュー



・写真右はサン・ミッシェルの、ヘ  
ミングウェイも愛した文豪カフェ。

